

平成29年度前期学校関係者評価書

南アルプス市立八田中学校

<学校関係者評価委員>

室田 直樹 (学識経験者、元小学校長)
清水 秀幸 (学識経験者、元中学校長)
大堀 俊介 (平成29年度八田小学校PTA会長)
細川 真一 (平成29年度八田小学校PTA副会長)
大芝めぐ美 (平成29年度八田小学校PTA副会長)
小澤 昌史 (平成29年度八田中学校PTA会長)
川村 淳子 (平成29年度八田中学校PTA副会長)
小林みゆき (平成29年度八田中学校PTA副会長)
杉山真奈美 (平成29年度八田中PTA副会長)
神宮司静徳 (八田小学校後援会長)

1 質疑応答・意見交換

(1) 平成30年度から小学校に導入される道徳の教科化について

- ・年間35時間の中で、すべての価値項目を網羅して指導することを通して、内容の充実と道徳的価値を互いの意見交換等をしていく中で、深めていくことが大事ではないかと思う。また、評価としては、5段階や観点別のABCで行うのではなく、一人ひとりの心の成長、道徳的価値の発見などを文章として評価していく。
- ・通信表(通称：あゆみ)の評価にかかわる記入の形式については、南アルプス市教育委員会学校教育推進課の指導等を仰ぎながら検討する。
- ・ある一方向へと考え方を導いていく、という指導ではなく、主体的な考えや生きた活動へとつなげていきたい。一人ひとりの評価は文章記述によるものであり、その成長等の事実を書く。
- ・中学校では、普段の日常生活全体がいわゆる道徳指導でもあり、合唱など行事を通して様々な葛藤や生徒同士のぶつかりの中からも、いろんな考えを知ることができる。教科としての道徳を柱に、学校教育全体を通してコミュニケーションによる価値の深まりへとつなげていきたい。

(2) 小学校における2年ごとのクラス替えについて

- ・同じ先生に2年間見てほしいという思いもあるが、学級数が各学年2クラスという現状から児童同士の日ごろの人間関係を考えると、毎年のクラス替えでもよいのではないかと思う。
- ・現在の児童の様子から、小学校としては、6年間を低・中・高学年という2年間ずつの間隔でのクラス替えがよいのではないかと感じている。
- ・年毎に次年度のクラス替えにかかわり、保護者からの声を学校は大事にしたい。
- ・他県などでは、6年間クラス替えがなく、また同じ担任ということも聞いたことがある。

- ・高学年（５・６年）の２年間はクラス替えがなく、また同じ先生が担任であってほしい。多感な時期ということもあるので、どちらが良いかということも言い切れない。その年に問題等（いじめ等）が起こったのなら、次年度は替えてほしい。
- ・保護者としては、信頼できる先生に担任をしてほしい。
- ・日頃の学校生活の児童生徒のようすを加味したことを優先すべきではないか。
- ・学校と保護者が意見交換する中で、一緒に考えていくのがいいのではないかと思う。

（３）全国学力学習状況調査の結果について

- ・私たち教師は教科を教えるプロなのだから、授業規律をしっかり確立させていかなければならない。ただ一方的にしゃべるだけの講義的な授業をするのではなく、コミュニケーションを図りつつ児童生徒が主体的に学ぶ授業とするよう喚起しなくてはならない。教師は授業で勝負ということを大切にしたい。
- ・最近の生徒はスマホを使う時間がとても長く、学力向上にもそうした影響もあるのではないか。
- ・本地区は、小中が１校ずつなので、小中の９年間は他から入ってくる要素がほとんどない。中巨摩の他の学校を見ると、そのほとんどが、複数の小学校から中学校へと集まっている。そのことがより良い競争心を生んでいると思うが、八田地区にはそれが無い。

（４）人間関係が固定されることについて

- ・八田地区は保育園の時から、勉強ができたり運動ができる子が固定されてしまう。高校に進学した時に、初めて自分よりできる者の存在を知り、ショックを感じるということを経験したことがある。
- ・人の役割が固定されてしまうことは、他にもあり、ピアノができる子は決まっています、その子が合唱の伴奏をするんだという固定的な捉えとなっている。そのことにより、伴奏をやったことがない子は、伴奏をしたくてもいつになってもできないという状況になってしまうこともある。

（５）部活動に限られることについて

- ・本校は学校規模からして教職員の数に限りがあり、指導可能な部活動の数にも限りが出てしまう。開校当時から比べたら、約半分の部活動数となってしまった。部活動のかかわりから他の中学校へと進学を希望する者もいる。
- ・本校の現在の学校規模（教員数と生徒数）では、部活動を増やすのは難しい問題である。生徒数が今後も徐々に減っていく見通しの中では、部を減らすことはあっても増やすことは考えづらい。
- ・他地区の中学校では、以前５つあった部が今では２つだけとなってしまった。
- ・また、ある地区の中学校は、規模が大きく校舎の廊下は１００mあるが、当時とは違い現在では生徒数が減少し、かつて普通教室として使っていた教室が、今では部活動の部室として使われているということを知っている。
- ・中学校では、年度当初に部活動の顧問を決めるとき、その勤務する学校の部活動指

導で、教師自身が経験したことがない担当でもやらなくてはならない場合もある。そのような状況下で、学校長は顧問をお願いするのに大変苦勞する。現在行われている各種大会は、その学校の生徒が出場することによって、教員が付き添わなければ生徒が大会に出場できないので、少ない教員数の中で決めていかなくてはならない現状がある。

(6) 開かれた学校づくりの創造について

- ・本校は、保護者や地域の方々に対し、いつでも来校していただきたいと思っている。常日頃から、どうすれば多くの人に来校していただけるだろう、と考えている。学校としては、多くの人に来校してもらい、ぜひ普段の授業を見た感想をお聞きしたい。学校を成長させていくために、保護者や地域の方々の多くの声がほしい。また、八田小学校から八田中学校に進学する際、私立や部活動にかかわって、年々他の中学に進学してしまう児童が微増している。八田中学校をもっともっと魅力的にするには、どう創造することがいいかの声を学校に届けていただけるとありがたい。
- ・2学期以降は、より多くの外部講師等の講演を企画しているので、保護者や地域の方々にも遠慮なく学校に来ていただきたい。
- ・保護者としては、日ごろの授業の様子等、気になる授業や指導等の様子を見に行こうと思う。
- ・小学校の子供にとっては授業参観に親がいないと、少々かわいそうになってしまうが、中学校になると子供から来なくてもよいということを往々にして言われてしまう。また、中学生ともなれば、それなりにそつなくやっていたらそれでいいのでは、と思ってしまう。
- ・地域や保護者にとって、学校は行きにくいところという思いがあり、敷居が高いところとなっている。
- ・学校側から「いつでも来てください。」と言われても、来校する何か（理由等）がなければ、フリーではなかなか行きにくい。ましてや仕事もあるので、それを休んでまで行こうとはなかなか思わない。
- ・子供から「是非、来て。」と言われれば「行こう」と思う。

(7) 八田地区のアンケート結果と他の地区との比較について

- ・肯定的評価が80～90%と高いが、他の地域や学校ではどのような状況か。
- ・本校では、この評価にかかわるアンケートを実施し始めたころ、保護者に依頼したとき、回収率が30%程度とかなり低い状況だった。しかし、取組を重ねるごとに、今ではほぼ100%近い回収率となっている。
- ・以前、他の中学校での当時の取組状況を聞く中で、学校が荒れている状況下では、肯定的評価が低い数値を示していた。その状況が改善されていくとともに肯定的数値は上がっていった。地域からの評判も、あいさつなどがとてもよいなどと、どこからともなく伝わってきたりして、そのような状況が、数値にも反映されていたことを伺っている。

(8) 携帯電話の保有について

- ・生徒の携帯電話保有率が、どの学年も70%と高いが、このことについてどのように考えるか。
- ・卓球界のスーパー中学生、張本君の報道で聞いたことだが、小学校の時に学校の図書室の本を6年間ですべて読んだと聞いた。自分で考えて主体的に行動したこと、またそこから多くを学んだことにより、目標やしっかりとした自分の生き方へとつながったのではないか。また、現在中学生であることから、中学校の図書室の本も3年間ですべて読もうという目標をもっている、ということも本人が言っているそうである。
- ・多くの子供がスマホを利用する現在、親が自信をもって子供を信じること、子供自身にルールを考えさせ、自主性を育てていくことが大事である。

(9) 児童生徒の安全・安心な学校生活等について

- ・八田小学校の正門側の北東にある点滅信号で、東西の道は赤の点滅にもかかわらず、中学生の自転車登校する生徒の何人かが、いったん停止もせずに突っ込んでくる。とても危険であり、自治会では市の関係するところに点滅でない信号に変えてほしい、とはたらきかけている。